41　恋すてふ　我が名はまだき　立ちにけり　人知れずこそ　思ひ初めしか

壬生忠見



砂浜のハート

〈声に出してよんでみよう〉

コイスチョー　ワガナワマダキ　タチニケリ

ヒトシレズコソ　オモイソメシカ

＊語頭以外のハ行の文字、つまり、語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、**ワ行音**「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[1]　助詞の「は」も、現代語と同様、「ワ」とよみます。これを、「**ハ行転呼音**」と言います。

＊「**エ段の音＋う／ふ**」は、「**ヨー**」（前に子音がある場合には「ョー」）とよみます。したがって、「けふ」は「キョー（今日）」、「てふてふ」は「チョーチョー（蝶々）」とよむことになります。[2]

〈どんな意味だろう〉

恋をしている、という私の評判は、早くも立ってしまったのだなあ。

人知れずこっそり、この胸の中にだけ秘めて、思い始めたはずなのに・・・。

＊「てふ」は、「といふ」の縮約された形です。「名」は、噂、評判。「まだき」は、早くも、もう、という意味です。

＊第３句「立ちにけり」の最後の「けり」は、詠嘆を表します。この「けり」は終止形[3]なので、この歌は第３句が文末で、ここで切れることになります。このような歌の構造を「**３句切れ**」と言います。３句切れは、第２・３句の「７・５」の部分がまとま

ることになり、「**七五調**」と呼ばれるリズムを作り出します。七五調は、『古今和歌集』（905年頃成立）の時代以降現代に至るまで、日本語の韻文の一般的なリズムとなっています。[4]

＊「**こそ**」は、強意の係助詞です。この語が文中に用いられると、文末は**已然形**[5]になる、という文法上の規則があります。これを、「**係り結びの法則**」と言います。[6]　第5句末の「しか」は、過去を表す助動詞「き」の已然形です。**「こそ･･･已然形」**で、･･･だが、という**逆接**の意味を表します。

〈解説〉

忍ぶ恋の切なさが胸を打つ名歌として、古来、人気を集めています。

天徳四（960）年の**歌合**で、平兼盛の「40 忍ぶれど」の歌に敗れたため、作者の忠見はショックの余り死んでしまった、という言い伝えもあります。それほど、自信に満ちた作品だったのでしょう。いずれの歌の方が優れているか、甲乙つけ難く、後世に至っても議論のまととなっています。

さて、あなたは、どちらの歌のほうが好きですか？　それはなぜですか？　皆で話し合ってみると面白いでしょう。

〈作者と出典〉

作者である**壬生忠見**は、十世紀頃の歌人。生没年も、詳しい経歴も不明です。父は、『古今和歌集』の撰者の一人でもある壬生忠岑（→「30 有明の」）です。この「恋すてふ」の歌の出典は、３番目の勅撰和歌集（天皇の命令で編集された和歌集）である『拾遺和歌集』（1006 頃成立）です。

---

1 ハ行の子音は、８世紀頃に [p] から [Φ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて 11世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の [Φ] が [w] と発音されるように

なりました。なお、[ɸ] が [h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、17世紀頃と推定されています。

[2] 二重母音は発音しにくいためです。この変化も11世紀頃のことと考えられています。

[3] 活用形の１つで、文末に用いられる形を「終止形」と言います。

[4]「七五調」に対し、「５・７」を基本とするリズムを「**五七調**」と言います。五七調は、現存する最古の歌集である『**万葉集**』（奈良時代・８世紀頃成立）の基本的なリズムです。

[5] 活用形の１つで、接続助詞「ば」について原因・理由を表したり、「ど」について逆接を表したりします。

[6] 「係り結びの法則」は、14 世紀頃にはかなり衰退が進んでいたと見られています。